
世界侵略・東京攻防戦

モンスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界侵略・東京攻防戦

【Zコード】

N7772Y

【作者名】

モンスター

【あらすじ】

1942年ロサンゼルスで未確認飛行物体がその後もあらゆる地域で確認される。そして2011年・・・小惑星と共にやってきた侵略者達は

世界中の首都を攻撃。それは日本も例外では無かつた。

これはロサンゼルスで起きた事件と同時に起こった日本の事件。
(注 この小説は世界侵略ロサンゼルス決戦の日本で起きた事件として

勝手に考えた小説です(

第0話 小惑星群（前書き）

ついに世界侵略口サンゼルス決戦を元にした小説が完成しました。
出来るだけ完成度の高い小説を目指します。

第0話 小惑星群

1942年ロサンゼルス上空で未確認飛行物体が確認される。

その後も1965年ブエノスアイレス、1983年ソウル、1991年ロンドンでも

未確認飛行物体は確認されたが実態は、分からぬままだった。

そして2011年・・・戦いが始まる。

2011年・・・東京のあるテレビ局

「明日にも地球に衝突するとされる小惑星ですが、東京湾沖にも墜落すると分かりました。

既に東京湾の側の地域には、避難勧告が出ていますが小惑星が落ちてくる瞬間を見ようと

たくさんの人々が東京に集まっています。多数の渋滞が既に確認されているので外出は

控えたほうが良いでしょう。以上が小惑星に関する情報です」

東京湾付近

「皆さん、ここは避難勧告が出されております。下がってください」と押し寄せる群衆を下がらせようとする俺、天月直人に小惑星を見るためにやって来た

群衆が罵声を浴びせて来る。

「つるせー、俺達が何をしよう」と自由だー

そうだ、そうだ、とそれに賛同するものなどが現れ下がらせるには一苦労だ・・・

隣では仲間の福田俊介が俺と同じ立場にあっている。

いつそ手に持っている銃を使って脅してやろうかな・・・

ちなみに彼らは警察に所属する特殊部隊SATの隊員であった。

避難勧告が出ている地域から人を追い出そうと上層部が俺達SATに命令を下したため今ここに

居るのだ。

そしてここに派遣されてSATの隊員は全部で10名しかおらず、それに対し群衆は100人以上居る。

他には制服警官が何名かごく少数の人数でこれを追い返すのはものすごい苦労が予想された。

なぜ増援を呼ばないんですかと隊長に聞いてはみたがこう返された。
「今この東京に物凄い数の人間が集まってきた。だから色々な場所に警官を派遣しているからここにはこれ以上人員が割けないから・・・・と。

SATには念の為二ユーナンブM60短銃とMP5A4が持たれていたが発砲許可は出ておらず大して役に立たなかつた。

そこで中々いい作戦を考えた。

ようやくこの銃が役に立つた。

「ここから下がってください！私達には発砲許可が出されています！」

銃を構えながら怒鳴り声で言った。

さすがにこれは効果があつたらしく群衆は下がり始めた。

よしよし。上手くいってる・・・

ここで予想外の出来事が起きた。

何と群衆の一人が包丁を取り出したのだ。

「おい！それを地面に落とせ！」

ほかの隊員は離れたところに居るので全く気づいていなかった。

「うるさい！」

男は包丁を向けながら威嚇してきた。

俺も銃を向けながら睨みつけた。

「お前、麻薬でもやつてんのか？」

「ああそうだ。悪いか？」

いや悪いだろと言いそうになつたが興奮状態のこいつには何をしで
かすか分からぬから

やめておいた。

「ともかくその包丁を地面に置け。今ならまだ許してやる」「
もちろんハツタリだ。こんな奴は逮捕してやる。

それから長い間にらみ合いが続いた。

だがついに男も銃には勝てないと感じ包丁を落とした。

今だ・・・

一気に男の目の前まで行くと男のみぞおちをなぐりつけた。
男は痛みでうずくまりながら再び包丁を取ろうとした。
包丁を遠くに蹴り飛ばし男の腕に手錠を掛けた。

遠くにいる制服警官を呼びこいつを護送車に連れて行かせた。

俺はタバコを吸おうと取り出したが中身が空っぽだということに気づいた。

「くそ！」

タバコの箱を投げ捨てると隊長と部下全員がやつて來た。

「どうしたんですか。こんな所に全員集まつて？」

「我々の任務は終わりだ。ここからは自衛隊がここを引き継ぐ

「なぜ自衛隊が来るんですか」

隊長は質問に答えようとしたがその前に別の所から声が聞こえた。

「それは機密事項だ・・・天月君」

声が聞こえた方を見ると二十名ぐらいの自衛官を連れた男が現れた。

「お前は・・・

俺は彼を知っている。それどころか親友だった。

「久しぶりだな・・・天月」

彼・・・神崎悠人は俺達に近づいてきた。

「機密事項ってどういうことだよ。悠人！」

「それは話すこと出来ない・・・今はな

それだけ言つと悠人は一人さつさとどこかに行つてしまつた。

「お前達！ここから早く出ていつてくれないか」

自衛官の一人が言つと隊長は「分かつた」と言い俺達を連れヘリ「ベル412EP」へ向かつた。

「隊長！彼らは何かを隠しています」

隊長は俺に振り返ると「ああ。分かつてゐる」と一言だけ言いまた歩きだした。

その後隊長から聞き出すのを諦めヘリに乗りこの地を去つた。

第0話 小惑星群（後書き）

御意見、御感想、御待しております。

第一話 護衛艦沈没（前書き）

少し投稿が遅れました。すみません。

第一話 護衛艦沈没

アメリカ・ホワイトハウス

「大統領、これを見てください！」

突如大統領補佐官の一人が部屋に入ってきた。

「何だ？ 今忙しい・・・」

私の言うことを無視して補佐官はテーブルにある写真を置いた。

「これは？」

「これはNASAから送られてきた写真です。まずはこれを・・・」

補佐官はまず机の上にある写真を見せてきた。

「これは7時間後、地球に飛来する小惑星群です」

この写真を見たところで何も変わったところがなかった。

「これが何なんだ？」

少し怒りを覚えながら言った。

「次はこれです」

今度はCDを出してきた。

「これを見てください」

補佐官はどこからか持つてきた再生機器を使い映像を出した。

「これはNASAが小惑星の墜落速度を予測したものです」

映像を見ていると隕石が現れ地球に飛来するシーンだった。そして問題はこの後だった。

「・・・待て！ なぜ途中で小惑星のスピードが落ちたんだ？」

補佐官は躊躇いながら答えた。

「これはNASAの仮説ですが・・・ 地球に到着する際スピードを落としたことからこれは

侵略の可能性があります」

補佐官の言つことがよく分からなかつた。

「どういふことだ？」

「地球外生命体の侵略といふことです」

「証拠はあるのか？」

「世界のあらゆる都市にこの小惑星はほぼ同時に墜落する」とです

「これはさすがに私も認めるしかなかった。

「本当なんだな？」

「はい。嘘は言いません」

東京上空・ヘリ「ベル412EP」

「隊長。誰からの命令ですか?」

ヘリに乗つてから隊長は何も言わずヘリの中は沈黙に包まれていた。
「もう一度言います。誰の命令ですか?」

今度も答えないのかと思ったが意外に隊長は答えた。

「総理だ・・・」

この発言にはとても驚いた。

「なぜ総理が俺達に口出しするんですか?」

「それは俺も分からない。多分俺たちには話せないことだろう」

結局真相は分からぬまま警視庁に着いた。

「ともかく今日は、任務は終わりだ、これで解散」

翌日・東京都内のアパート

どこからか目覚まし時計が鳴つていて
手で押そうとするが見つからずそのうちまた深い眠りに落ちついていた。

体中から感覚が失われていく中耳は最後まで残っていた。

その時ドアが開く音がした。

「うん? 何だ・・・

その後足音が聞こえた。そして足音はどんどんと近づいてきた。

「起きろー早く

急に意識が覚醒した。

急いで起き上がるとそこには同僚の福田俊介が立っていた。

「何でここにいるんだ？ てかどうやって入ったんだ？」

寝ぼけながら言った。

「おいおい忘れたのかよ。 昨日お前が俺に酔っ払いながら鍵を渡したんだろ」

そういうえばそんなことあった気がする。

「そういうばそそうだな。 で・・・何の様だ」

「実は俺の家のテレビがぶつ壊れて今日は小惑星が落ちてくるだろ。

その瞬間をお前の家の

テレビで見ようと思ったんだよ

これには俺もきれそうになつた。

「何で俺の家何だよ？ それに見に行けばいいじゃないか？」

「お前は馬鹿か。 昨日自衛隊が来だろ。 俺達がどんな目に合わされたか忘れたのか」

まあ昨日の自衛隊の行動は解せなかつた。

「そんなんところには行きたくねーんだよ

「もういいよ・・・てか今日は仕事があるんじや？」

これには俊介がニヤニヤしながら答えた。

「大丈夫だ。 お前も俺も今日は風邪と言つことで休ませてもうりつて
いる」

11：58分・東京湾周辺

「現在多数の人々がここに押し寄せています。 そんな中先程東京湾
に海上自衛隊の

護衛艦 DDG 「あたご」 が到着しちらりと陸上自衛隊までもが先程から警備を行っています」

カメラが護衛艦 「あたご」 や陸上自衛隊を移している間私、小沢優香は一瞬の休憩を取つた。

何で小惑星が落ちてくるだけで自衛隊が出動するのかしら？

これは絶対他の理由があるはず。だけど今は何の証拠もなく真相を突き止めるのは難しかつた。

再びカメラが私を撮し始め考えるのを止めた。

「さて現在12時です。小惑星が落ちてくる予定時間に入つてます」そこまで言うと周りのアシスタンントなどが上を見上げながら騒ぎ出した。

私も上を見上げると小惑星が見えた。

「たつた今小惑星を目で確認しました！」

カメラが小惑星が海に落ちていく瞬間を映し出した。

その時「さらりに落ちてくるぞ」と聞こえ再び上を見上げると小惑星3個ぐらいが空から降ってきた。

「さらりに3個落ちてきます！！」

二個の小惑星が海上に落ちもう一つの小惑星が落ちた場所は護衛艦「あたご」だつた。
「あたご」に直撃

「たつた今大変な事態になりました！！小惑星が海上自衛隊の護衛

したのです！！船員の安否が気になります」
その時カメラマンが小惑星に直撃された護衛艦を映し出した。

その映像に何かが映つた。

「何だこれ・・・」

カメラマンが護衛艦を映しながら呟いた。
私も護衛艦を見つめた。

護衛艦で何かが動いた気がした。

次の瞬間護衛艦から何かが飛んできた。そしてそれは群衆の一団に飛んで行き爆発した・・・

その瞬間大パニックが起きた。

海から何かが歩きながら出てきたのである。

何なの・・・あれは。

第一話 護衛艦沈没（後書き）

御意見、御感想、御待しております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7772y/>

世界侵略・東京攻防戦

2011年12月1日19時54分発行